

STORY DIGEST >> CHAPTER03: 対魔忍ムラサキ

ILLUSTRATIONS BY KAGAMI VISUAL WORKS
 ILLUSTRATIONS BY KAGAMI VISUAL WORKS



「うぐいひひいひいっ！」
 マングリ返しにされたイングリッドのヴァギナに、醜悪なオークの生ペニスが入り込んでいる。さらに、媚薬でとろけきったヴァギナの上部のクリトリス、加えて乳首には針が刺されており、微量であるが電流が流れ続ける。

「ひくい……あふんっ！ まら……まらいく……マラでまらいくっ！」

「はははっ！ 魔界騎士様なんて言っても、所詮はただのメスだ。気持ちいいか、このブタメスめっ！」

誇り高き魔界騎士に、醜悪なオークの無様な言葉が投げかけられる。

「うふ……ふうえ……お、お、おっ」

まるで永遠に、このまま終末がこないような錯覚を憶える性交とはとても呼べない拷問の中、イングリッドの意識はいつまでも明滅を繰り返す。

一体、どれだけの時間が経過したのだろうか？ 突然に、クリトリスと乳首に取り付けられた電極が瞬いた。そしてその意識ともども跳ね起きた肉体に、上から皮革でできた豪雨が降注し、体内を流れ続ける電撃と、間隙をもって降り注ぐ鞭の責め苦。

「うきいひぐふううううっ!!!」

その身体の内外から加えられる激しい痛みの中、彼女はもう一度絶頂を迎えた。一度大きくたわみ、一気に弛緩した彼女の股間から、透明の液体が噴出しアーチを描く。

噴出した自らの尿を、イングリッドは尿道を引き締めることも考えられずに、顔面を受け止めるしかなかった。



ぶははっ！ なんだなんだ？
 魔界騎士様はご自分のシヨンベンが美味いってか？



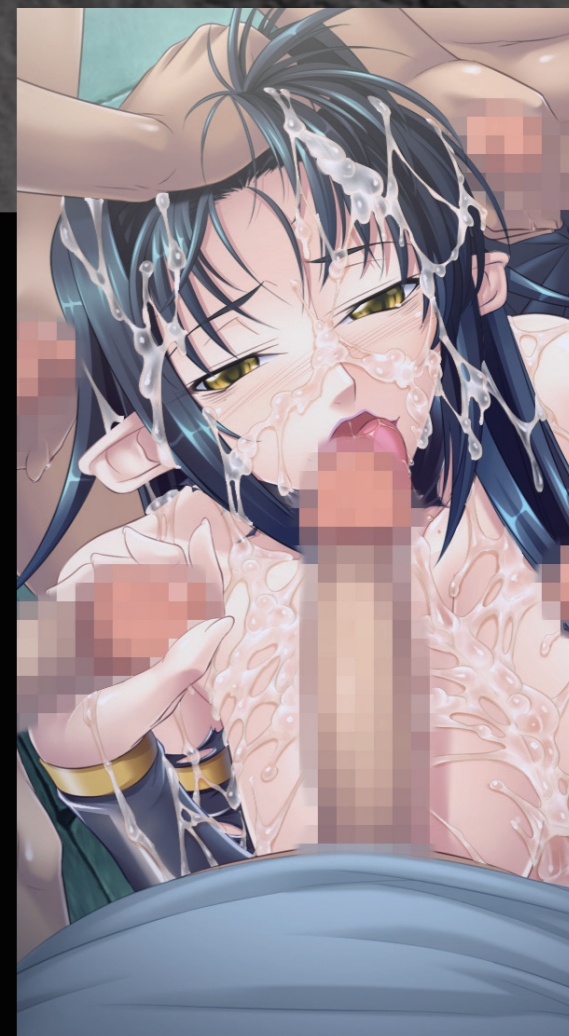
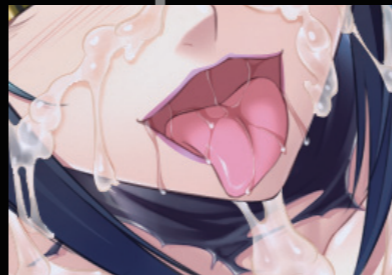
アア……! はい♪

これから毎日、皆さんにおチンポブチ込んでもらって、



ザーメンごくごく飲ませていただきます……♪♪

ILLUSTRATION



STORY DIGEST ▶▶ CHAPTEROS: 鋼鉄の魔女アンネローゼ

先刻までアンネローゼを犯していた男が、体液にまみれた肉棒を突き出すと、アンネローゼはすくさま底え、突らせた舌を差し出した。

「んっ……。ヌルヌル、みんなおチンポを濡らしちゃつてるじゃない……」
たび重なる凄惨なアクメに意思の力を打ち砕かれ、今のアンネローゼは快楽という糸に操られる人形のように、恍惚の表情で男たちのいいなりになっ

て奉仕している。
「ずずっ、じゅるるるっ、ずじゅるっ……んぐっ、んんっ」
たつぷりと粘り気のある白濁を、繰り返し口の中に送り込むと、こく、こくっ、と喉を鳴らして飲み込んでいく。切なげに目頭を震わせ、頬を真っ赤に染め、大切なものをうけとるかのよう

に両手を掲げて、最後の一滴までアンネローゼは嘸下し尽くしてしまふ。
「さら! ザーメン大好き魔女様に俺からのご褒美だっ!」
「えうっ!? うはっ、はい……」
だめ押しとはかりに降り注ぐ白濁液を、アンネローゼは顔で受け止め、舌に絡め、言われるままに飲み下した。

「よし! 真正正銘のメス豚になった記念撮影するぞ!」
尻ポケットに手を伸ばした数人の男が、こそこそと携帯端末を取り出す。
「はい、チーズっ!」
「はい……んっ」

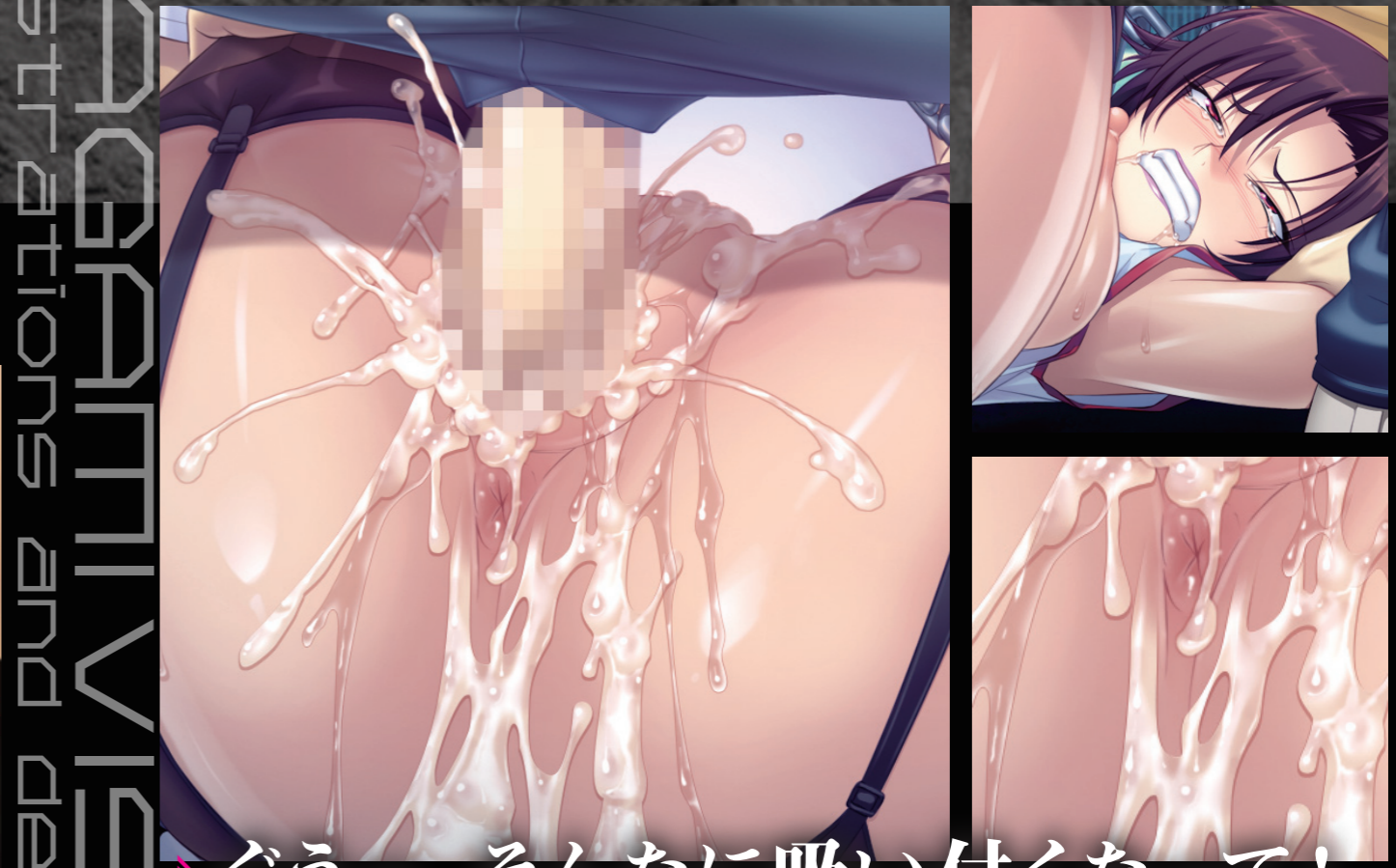
アンネローゼが携帯のレンズに向かってきこえない笑みを作ると、男たちは次々にシャッターを切った。

ILLUSTRATION DESIGN WORKS BY KAGAMI

STORY DIGEST >> CHAPTER05: 鋼鉄の魔女アンネローゼ

「うらっ！ ギョーんッ!!」
 台の上の男が、メイフォンの股間に
 しゃがみ込む要領で肉棒を突き入れる。
 「くふぁオオッ!!」
 奥底までを貫く挿入に、一度絶頂に
 達したメイフォンの反応は激しかった。
 「そら、そら!! 感謝しな! ドスケ
 ベマンコを喜ばせてやってるんだから
 よっ!!」
 「くお! えアアッ! うるさいわ、
 よおおっ! アッアッ! くあアッ!
 動く、なああっ!」
 言葉とは裏腹に、メイフォンの性器
 はたちまち熱を帯び、男の性器を分泌
 した愛液でしどろに濡らしていった。
 「うらっ! どうだ……!? ザーメン
 大好きだろっ、白蛇様は……っ!!」
 「ききききッ! イッひいー!!」
 熱い精液の感触に、メイフォンはあ
 えなく連続絶頂に達して、快楽に狂喜
 した括約筋が男の肉棒をギュウギュウ
 と締め付けるのを止められない。
 「今度はこっちだオラッ!」
 張り詰めた亀頭を押し付け、男がネチ
 ネチとこね回しているのは、本来の性
 穴ではなく肛門だ。
 「でひいイイイイーッ!!!」
 肛門を押し広げ肉棒が直腸に侵入し
 たのと、メイフォンが絶叫と共にオー
 ガスムに登り詰めたのは同時だった。
 「え……ヒ……! へひっ……! ひ
 へえ……!」
 意味を成さない切れ切れの声を漏ら
 しながら、その間もメイフォンの肛門
 は、男の肉棒を食い締めてヒクヒクと
 収縮を繰り返していた。

ILLUSTRATIONS AND DESIGN BY KAGAMI



「ぐうっ、そんなに吸い付くなって!
 たっぷりおみまいしてやるからよ……おらっ!!」



ポーガンはアリシアの体を持ち上げ、そのまま押し倒すと、悦楽に湧けくったりとなったアリシアの顔の上に跨る。

「ふぶっ!? ふぐっ!!!! くっ……ンダグウウウウウウッ!! くぶっ!? グブウウウウウッ!!」

突き込まれた精液と淫汁にまみれた肉棒に、アリシアが大きく眼を見開く。「くくっ、マンコ汁とザーメンの味はどうだ? メス豚將軍には大好きな味だと思っかね?」

「ぬ、抜けえっ……くっっ、ゆるしゃんっ……ふぐうっ、こ、こによよよなあつ無礼なこひよお、ゆるしゃんっ……ろおっ……ふぶっ! くぶっ!!」

「おおっ、アリシア様。マヤ様が大公になれるかどうかは、私の一存にかかっている事をお忘れなく」

機先を制するようにアリシアに、改めて自分の立場を思い知らせる。「口マンコでもしっかりイカせてあげますよアリシア様」

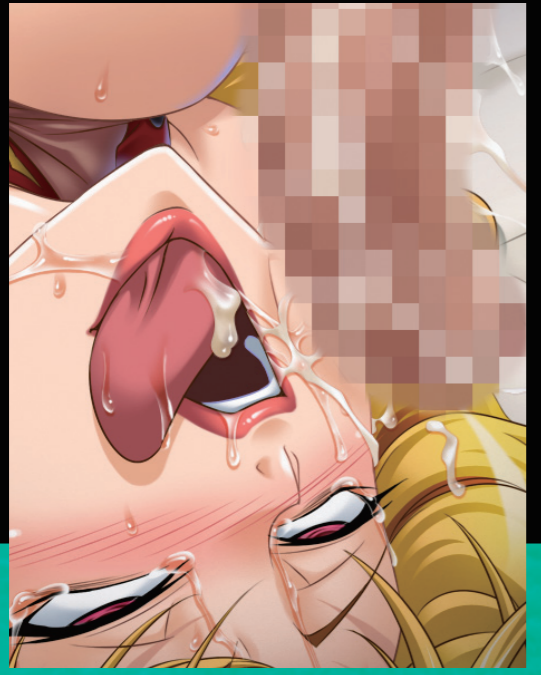
あからさまに悔しそうな表情を浮かべるアリシアにその告げると、ポーガンは突き込んでいた肉棒を、唇をまくれ上げらせながら、少しずつ引き抜きにかかる。

「くぶうううっ!? んぎゅっ……ズビュッ!! ずりゅりゅっ……ふぐううっ! うぎゅうううっ!!!」

「くくっ! これがフェラチオですよアリシア様! 立派なメス豚將軍になる為にはしっかりと覚えておかねばなりませんぞ!」

ポーガンはアリシアの膣穴を思わせるような生温かい口内を、滾る肉棒で容赦なく犯し続ける……。

くくくっ、失神してもザーメンを舐めるか。さすがは、メス豚將軍

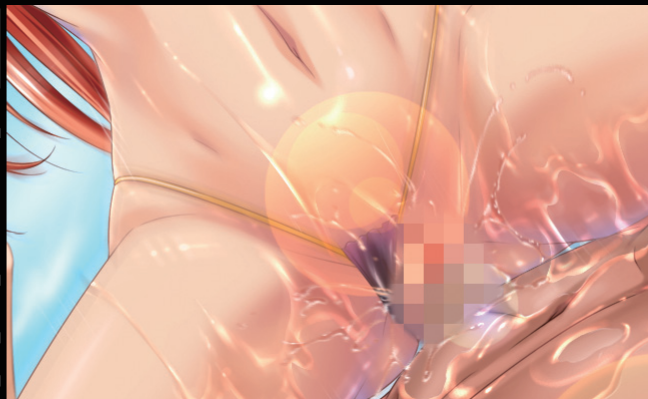


ILLUSTRATION

ART

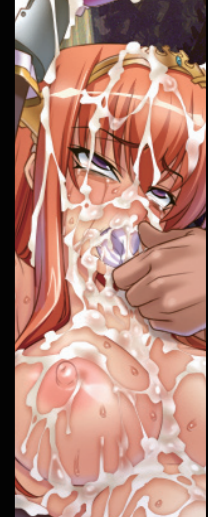
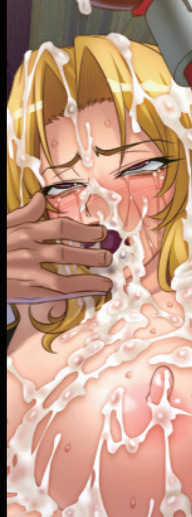


▶雄の味はどうだ!? メス豚の大好きなザーメンだ!
当然、美味しいだろう!!



STORY DIGEST >> CHAPTER06: 監獄戦艦2

「さあ、そろそろ皇女様の本性を、国民たちに見せつけてやろうか? んん? クリトリスをピンピンに勃起させたメス豚姫の姿をな!!!」
ゴードンの命令に抗う事も出来ないマヤは、ノロノロと身を起す。
「ひああうっつっつ!!!」
ピンピンにいきり立つ肉棒の上に、肌をテカらせたマヤがしゃがみ込んだ。
「あっ、ひゃあっ、わ、わたひっ……こんな所で……へひゃっ、せ、セックスしてるっ……変態みたい……本物の変態みたい……!!!」
修学旅行の若い観客に見られながら、肉棒を啜るこんでいく屈辱。
「おい、マヤ様のあれ、ひよっとしてせつくすつて言うんじゃね!!」
彼らは股間を固くさせて、ただ憧れの姫君の痴態に魅入っている。
「ひううっ、ううっ、そっよおっ、わたしっ、あなたたちの前で……せ、セックスしてるのっ、させられてるの……ううっ」
屈辱を感じる一方で、身体は押し入ってくる雄々しい存在に悦びの反応を見せてしまう。
「はあっ、ひああっ、あっ、ううっ、あの目っ……イヤイヤ、興奮してる……こんな私を見て……みんな興奮してる……っ、ううっ」
纏わりつくような無数の視線の中で、男に跨り、男をイカせる為に腰を振る恥ずかしさと、込み上げてくる快感に耐えるマヤの顔からは皇女の凛々しさは消え、一匹の雌と化したように悦楽を貪っているようだった。



▶ せっかく出して貰った大切なザーメンを出すなよ豚!!

STORY DIGEST >> CHAPTER06: 監獄戦艦2

アリシアとマヤは両手両足に鋼鉄の枷をはめられ、天井から鎖で吊るされて宙吊り状態だった。無理矢理股を広げられ、男達の股間の位置に調節されて膣穴をスコスコと犯されている。「おらあー！ もつちよつと気持ち良さそうに喘いでみるよっ!!」

「は……っ。くっふっ、おう……!!」

「メス豚ならメス豚らしく鳴けよ！ グロッキーになつてんじゃねえ!!」

「ほお……!! おお、おん！ んお……お、んん……っ」

二人は意識朦朧のまま兵士達にいいように貪られている。大量のザーメンでまだ妊婦のように膨れた腹をゆさゆさと揺らし、お互いに小さな呻き声を漏らすのが精一杯のようだ。

「クククッ。さあそろそろ気絶タイムは終了だ！ 絶頂しながら起きろメス豚どもっ!!」

大量の精液を拭き取ったインナーを二人の口に押し込み、ポーガンが思い切り握力を込めて尻肉をぎゅむつと驚かす。

「ぎゅおおお、おおおっ!!」

「はくあぁあぁあぁあっ!!」

ザーメンドールとして改造され、精液を口に含んだ二人はビクウツ！ と仰け反っていきながら目を覚ました。「そろ、お前達の大好きなザーメンだ！ しっかり吸え！ もし一滴でも残したらまた一から兵士諸君の相手をしてもらおう、クッククック!!」

さっきまで床に溜まっていた汚液と知ってなお睨る二人の姿は、まるで本物のザーメンジャンキーのようだった。

OPUS BY KAGAMI

「ご褒美だ。尻を上げる」
 いやいよ褒美を与えることにした
 ボーガンは、キリアにふさわしい格好
 をとらせた。すなわち四つん這い。雌
 犬のポーズ。

「両手をついて腰を出せ。犯してもら
 うためにマンコを突き上げる……」
 「やめろお、命令するなっ、うあああ！
 やめろお……！」

悲鳴の後半は、勝手に命令に従おう
 とする自分の身体に向けた物だろう。
 だがそれも空しく、キリアは完璧なま
 でにボーガンの命令に従った。

「ちなみに、この一部始終はインゲボ
 リが撮影してくれているぞ」

「ふん！ ひんっ！ クソおおお……
 オホオオオオオオオッ!!!」

ずどん、と一気に貫かれ、キリアは
 堪らず歓喜の悲鳴をほとぼらせた。

「下の口だけでは到底満足しないだろ
 うからな、サイドメニューも用意した」

キリアの眼前には大きな金属製の皿
 が置かれ、そこには男たちの精液がな
 みなみと注がれている。

「遠慮はするな。それを飲みながらイ
 け」

如才なくキリアの顔をスームアップ
 したインゲボリが、ファインダーを覗
 く顔をほころぼせる。

「撮るな、うひい、撮るなあ……っ」

「飲んでいぞ。飲め」

「れ、ろおろっ！」

すぐさまキリアは命令を実行した。
 すでに意志とは無関係の絶頂を重ね、
 半ば放心しかけているキリアだが、そ
 れでもボーガンの言葉は絶対だった。

ふひん！ ああ来るっ、チンポ！
 下種のチンポが来るっ、フゲン、イクイクイク……っ!!!



ILLUSTRATION

MEIN